

自選 五十首

大辻隆弘

Takahiro Otsuji



「おおつし・たかひろ」昭和三十五
 (一九六〇)年三重県生まれ。岡井隆
 に師事。「水廊」「抱擁組」(現代歌人
 集會賞)「デブス」(寺山修司短歌賞)
 など。論集「子規への潮行」「岡井隆と
 初期未來」「時の基底」「アラギの香
 梁」(日本歌人クラブ評論賞・島本赤
 彦文学賞など)。「未來」選者。

疾風にみどりみだるれ若き日はやすらかに過ぐ思ひるしより

「水廊」(一九八九年)

青嵐ゆふあらし過ぎ街路樹にわが歌ひ得ぬものはさやぐ

朱夏、麦にゆるるひかりを「存在の肌理」としメルロ・ポンティイ言ひき

山羊小屋に山羊の瞳のひそけきを我に見せしめし若き父はや

指からめあふとき風の谿は見ゆ ひざのちからを抜いてごらんよ

ゼフユロスは雨をたづさへ街路樹とわれらを濡らす、別れを言はう

あかねさす真昼間父と見つめる青葉わか葉のかがやき無尽

十代の我に見えざりしものなべて優しからむか 闇洗ふ雨

あじさるにさびしき紺をそそぎる直立の雨、そのかぐはしさ

やがてわが街をぬらさむ夜の雨を受話器の底の声は告げゐる

北空は寒きかけりを帯びながらいざなふごとしわれと一羽を

踏切の向かう燈火にてらされて異界をぬらすことき夜の雨

綿毛とぶゆふぐれ母の呼ぶごときジェルソミーナといふやさしき名

体内に海抱くことのさびしさのたとへばランゲルハンス島といふ島

雑踏にまぎれ消えゆく君の背をわが早春の遠景として

青春はたとへば流れ解散のごときわびしき杯をかかへて

ふるさとを去らぬは持たぬことに似て九月 素水をつらぬくひかり

【ルーノ】（一九九三年）

秋の陽のかけらふ処々に纏足の滴々たる少女たつと思ひつ

神が手を伸ばしてぞ挽ぐ柑橘の類はひと日卓のうへにあり

天上の山羊の乳よりしめやかに地上を浸すはじめての霜

つきかけは細部にも射し陶片の青磁のいろの夜半のはなびら

朝庭に空き瓶を積むひびきして陽ざし触れあふごときその音

秋の陽をあまねく容るる窓の辺に紙を揃ふる手かしろく見ゆ

凍るやうな薄い臉をとちて聴く ジュビア、ジュビア、寒い舌をお出し

校庭を生絹のごとく覆ひたる霜としいへどやがて泥濘

【抱擁韻】（一九九八年）

戸袋に若葉のいろのうす闇が吐息のやうに差しこむ五月

自動車の横転したるうらがはは数かぎりなき管がからめる

あけがたは耳さむく聴く雨だれのポル・ポトといふ名を持つをここ

穂すすきのあはひに吾子は失せやすく鋭く迅くわれは呼ばれつ

くさぐさの稜たためて夕ぐれは萌黄に濁る峽のひかりよ

つまりつらい旅の終りだ 西日さす部屋にほのかに浮ぶ夕椅子

受話器まだてのひらに重かりしころその漆黒は声に曇りき

私が短歌を始めたのは、昭和五十八年の晩秋の頃である。

当時、私は二十三歳。龍谷大学の大学院一回生だった。好きで選んだ哲学の勉強だったが、進学するやいなや、現実の厳しさを思い知らされることになる。先輩たちは先の見えないオーバードクターの生活を続けている。研究者で食べていくのは困難だ。私は暗澹とした。

私は研究者になるのを早々にあきらめた。高校の国語教師の採用試験を受けることにした。

採用試験の勉強になるかなと思つて、NHK教育テレビで週一回放送されていた「短歌への招待」という番組を何気なく見ていた。講師は馬場あき子さんだった。

あるとき、その番組で「夏の歌」が特集されたことがあった。そのなかで馬場さんが、次の一首を読み上げた。

あの夏の数かぎりなきそしてまた
たつた一つの表情をせよ

小野茂樹の歌だった。私は、その歌を聞いた瞬間、何か、身体のなかに電気が走ったような気がした。短

わがごとく柿の萼を見下ろすか熾天使は酸きなみだに濡れて
とほき夏、手押しポンプの汲み口にしづかに垂れてるし布袋

子に乗せて木馬しづかに沈むときこの子さへ死ぬのかと思ひき

ああ父はまどかに老いて盗みたる梅の若枝を挿し木してゐる

車窓まで川のひかりは届きつつまどろみのなかに葦をいふ声

子を捨てるのにふさはしい林みゆ幹あをじろう灯るゆふぐれ

調弦をしてゐるらしい丈高き薔薇さびいろに枯るるむかうで

うすぐらく移る雨城を追ひながら東京へ行く車窓冷えたり

緑さむくかがやく壺ゆひとすちの乳はよぢれつつ注がれてゐつ

伊賀のくに霧生をすぎて青ぐらき曇りによどむ伊勢へおりゆく

会ひたいといふ、あひたさは冷えながらくだるなみだを追ひぬいてゆく

紐育空爆之囀の壮快よ、われらかく長くなかく待ちゐるき

突つ込んでゆくとき声に神の名を呼びしか呼びて神は見えしか

蜂蜜のよどみのやうな残光といへりそれさへつかのまにして

孔丘に鯉といふ息子ひとりありて命運のごと天したり

やはらかく畳のへりを踏んでゆく猫の足音のなかに覚めたり

肉厚き腹に網目がくひこんで吊り上げられてゆく秋の馬

傘の上を雨滴あかるく滑り落ちやがて待たれてゐむと思ひき

『デブス』(二〇〇二年)

『夏空彦』(二〇〇七年)

歌がこういうものであるなら、私も作ってみたい、と思ったのはその瞬間だったかもしれない。

私は、一晩で二十首ほどの短歌を作った。自分でも不思議なほど、次から次へと言葉が湧きあがり、スラスラと歌ができた。

先の見えない大学院生活を続けていた私には、心の中に何か鬱勃としたものがあつたのだろうと思う。短歌は、それを表現するための格好の詩形だった。

実家に配達されていた中日新聞に「中日歌壇」という投稿欄があつた。選者は齋藤史と岡井隆だった。岡井さんの欄には若い人の歌が多く載っていた。私は迷わず、その欄に自分の歌を送った。

考えてみると、私の短歌の第一読者は岡井隆さんだったのだ。

今も私は月一度、岡井さんのところへ歌を送り続けている。二十八年になる。ありがたい運命だと思う。